

# みらい通信

## 第25号

発行元 NPO法人紫波みらい研究所  
連絡先 〒028-3318  
岩手県紫波郡紫波町紫波中央駅前1-2-2  
電話 019-671-2244  
FAX 019-671-2243  
Email miraiken@shiwa-mirai.com  
URL <http://www.shiwa-mirai.com>  
発行日 平成20年1月9日



新年明けましておめでとうございます。

雪が積もって本格的な冬になってきましたが、皆さんいかがお過ごしでしょうか？

昨年は定例会の実施、定期的なエコスクールの開催など活発な活動ができました。今年も皆さんのご協力よろしく申し上げます！



## エコスクール大盛況！

# クリスマスリース&正月かざりづくり

12月13日、20日（毎週木曜 15時～17時）環境・循環PRセンター 参加者 延べ38人

12月のエコスクールは、ツルやダンボールを使ったクリスマスリースと正月飾りを作りました。レクリエーション協会の近藤好男さんに作り方を教えていただきながら、まつぼっくりや折り紙などで飾り付けをしました。

参加した大人の方からは「子どもたちに教えるのが楽しい」と言う声が聞かれ、世代間交流を楽しみながらのエコスクールでした。



左 ダンボールで作ったリース  
右 ツルを使ったお正月飾り



私たちのリースかわいいでしょ！

## エコスクールこれからの予定

### 1月 夢灯りづくり

10日(木) 17日(木) 24日(木)  
午後2時～5時

空きびんに絵の具などで、  
かわいい絵をかいて、  
ロウソクの灯りとともす  
「夢灯り」をつくりま  
す！



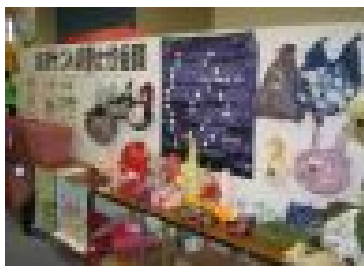
空きびんで作った夢灯り  
写真 よんりん舎提供

### 2月 ふろしきでラッピング♪

14日(木) 21日(木)  
午後3時～5時

地球温暖化防止のひとつ  
としてレジ袋削減の取り組  
みを行なっています。

ごみを減らすため、ふる  
しきを使った手軽なラッピ  
ングを覚えてみませんか！



ふるしきの包み方展示  
写真 紫波町ごみ減量女性会議提供

## 紫波冬まつり

### 夢灯りin紫波中央駅

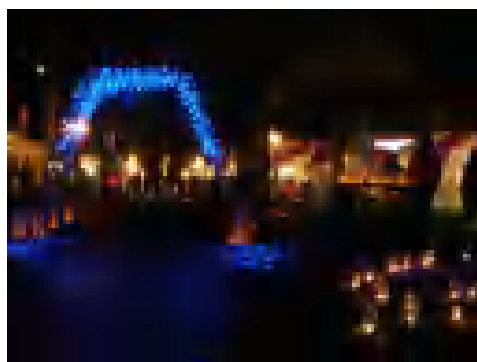
1月26日(土)午後4時集合

エコスクールで作った夢灯りを  
紫波中央駅にかざります。

みんなで設置する場所を考え、み  
んなで点火します。

冬まつりを紫波中央駅からも応  
援しましょう！

どべっこ、甘酒を用意します！



昨年(2007年)の夢灯りの様子  
写真 よんりん舎提供

## 2008年の夢を語り合った 忘年会

12月12日、紫波グリーンホテルで忘年会を  
開催しました。

年末の忙しい中ですが18人が参加し、細川栄  
子さんの毎日農業記録賞受賞のお祝いも兼ねなが  
ら、2007年を振り返り、親睦を深めました。



## 2月定例会

来月の定例会は2月13日(水)に行ないます。  
テーマは

エコについて話し合おう！  
- 疑問・意見・いろいろ -

紫波みらい研究所のミッションって何？

みらい研究所の活動をよりよく、有意義にする  
ために、みんなで話し合いましょう！



# 2007年(第35回)毎日農業記録賞(毎日新聞主催) 一般部門最優秀賞 細川栄子さん受賞作

農業を取り巻く厳しい環境の中で、農に携わる方々が活力を得るよう励まし、明日への希望を抱いてもらうことを目的とした毎日農業記録賞。

このたび、細川栄子さんがみごと受賞されました。  
毎日新聞の許可をいただいて、受賞作を掲載します！



## 私の『牛飼い』人生

北を見れば雄大な岩手山、西には奥羽山系の山々、東にくっきりと早池峰山。広々と田園風景が続く。数十年前まで荒野と松林だったこの土地を、私の親の世代が開拓し、豊かな農地にしてきた。この地に立ち、目をつぶる。この空気。この風。この香り。体中から湧き出てくる躍動感、先祖、親たちから引き継いだ開拓心なのだろう。

私の住む志和地区は、昔から志和型複合経営、循環型農業が盛んだ。我が家は8人家族で、水稻、和牛一貫経営、産直への農業物出荷販売を行なっている。私は、開拓農家の二代目として生まれ育ち、幼い頃から後継者として農業を見てきた。私は家娘だ。ランプ生活の中、家業を手伝わされ、自然と農業が好きになった。昔、農耕用として馬を飼っていたが、時代の流れによって馬から牛の肥育に変わり、我が家には、

朝鮮牛と呼ばれた赤毛の牛がいた。ゆったりとした大きな体と美しい毛並み、優しい瞳が大好きでその牛の世話はとても楽しかった事を覚えている。今の私はあの牛に育てられたと思っている。親たちはあの牛ですいぶん儲かったと喜んでいたが...

親から経営を引き継いだときは、水稻220a、肥育牛10頭だった。バブル、グルメの時代は作れば何でも売れる時代だった。私もその中で短角牛、ホルスタインの肥育をしていたが、今から12~13年前頃から「消費者ニーズは和牛」と感じ、JAの肉牛部会に入り、和牛肥育の勉強をしてきた。あの頃は、デリケートで神経質で体の弱い黒毛和牛の特性にびっくりしたものだ。

2001年には、子どもたちも育て上げ、念願の牛舎を建て、牛を増やしたいと思っていた。

そこに、BSE問題発生だ。忘れもしない。2001年9月、日本で1頭目のBSE感染の牛が発見された。連日、テレビはイギリスの足が麻痺して立てない乳牛の映像を何十回も映し、あたかも日本中の牛がBSEに感染しているかのように印象付けた。自殺者が出、会社、店は倒産し、畜産業界、食肉業界、日本中が揺れた。皆は正しい知識を持たないままに、風評、マスコミに振り回されたのだ。当時の新聞の隅に、肉牛450頭肥育している方のコメントが載っていた。



東根山と紫波の田園風景

「BSE の報道がされたとき、長男は他の仕事を探さんといかん。と言って求人広告を見ていた。牛飼いで三代目として彼に夢を託していたのに。私たちは、安全な牛を育てるために、牧草作りに汗水流してきた。しかし、私たちの知らないところで肉骨粉が出回っていた。どこに文句を言えば良いのか...」このやりきれない気持ち、私も同じだった。

私は少しだけ悩んだ。「牛舎新築はやめようか？やめるんだったら今だ」と。でも、心は「牛肉という食べ物がこの世から消えるわけではない。私は生涯の仕事に牛飼いをしたいのだ。やっぱり牛舎新築は続行しよう」と決めていた。そのときは何の不安も感じなかった。夫には「牛舎を建てるんだったら離婚だ！」と言われるし、

私の 1 番の理解者だったはずの当時農業大学にいた長男には「おっかあ、経営方針変えたほうがいいよ」と言われるし、父には「かまどけし！」と言われるし。当然のことだった。男手さえ尻込みするこの世の中に、女の

私が牛舎を建てるというのだから。確かに、当時出荷した牛たちは全くの赤字だった。たとえば、43 万円で買った子牛に、30 万円の経費をかけて仕上げ、肉で売るときはたったの 9 万円だった。丸々と太った牛が、たったの 9 万円。そんな牛を何頭も出荷し、将来に不安があって当たり前のことだ。家族も必死だった。

枝肉相場の暴落に、さすがの私もショックで、最後の 1 頭を出荷するときには「これも駄目なら牛舎はあきらめよう...」とかなり弱気になっていた。けれど、この最後の 1 頭が私に勇気と自信を与えてくれた。その牛の名は「まるこ」。私は子牛市場の名簿は一週間前には手元に置き、欲しい牛をチェックする。彼もその中の 1 頭で、

舌が白く小ぶりで、誰が見てもさほど魅力の無い子牛だった。その子牛が仕上がり、平成 14 年 3 月、まさに BSE の嵐が吹き荒れる中、まるこを出荷した。そして、南部牛女性枝肉共励会で最優秀賞をいただいた。芝浦の食肉市場の冷蔵庫の中のまるこを見たとき、自分の目を疑った。私は自分の牛たちの枝肉は大体目を通す。まるこの前に出荷した牛たちは、出荷規制を受けたこともあり、肉色も悪く、散々なものだった。それなのにまるこは、サシの入りも色もキメも、とてもきれいなものだった。私の首の皮一枚つながった思いがした。このとき、まるこに背中をぼんと押してもらい、牛肉の売込みにも力を入れた。

しかし、デパートやスーパーの売り場にも立

ち、牛肉を売ったが、ご時世のため全然売れない。お客様は、ばい菌でも見るように「結構です！」と言い、足早に去っていく。私は「そうじゃない！皆、もっと私たちが育てた牛を見てよ！」と心の中で叫んだものだ。

それから、生産者

の話聞いて欲しい、現場を見て欲しい。いくらだって時間も場所も提供しようと思い、視察もどんどん受け入れた。最初は皆、鋭い目で牛舎に入ってくる。でも、牛を見て触って、作業を体験してもらおうと、帰る頃には「来てよかった！こんなに大事に可愛がって育てられた牛肉だもの、安心ですね」と言ってくださる。「がんばってください！」と励まされ、当初、信頼を取り戻すのに 10 年にかかるだろうといわれた BSE 問題は、行政、民間が一体になり、約 2 年弱で乗り越えた。全頭検査のおかげだ。

こうして、私の牛飼いは順調に進んできたかのように見えた。ところが、皆の反対を押し切って建てた牛舎から出荷された第 1 号はなんと、



子牛市場の様子

病畜。途中下車だ。名前はサクラ。とてもショックで、彼がどんな病気で私の管理のどこが悪かったのか？つらかった。意地でも良い成績で、高く売って、反対した家族や面白半分で見っていた世間を見返したかったのに…。その頃の私の根性は少し曲がっていたようだ。岩手畜産流通センターでサクラを屠畜した。順番を待ちながら、そばで「サクラ、がんばって！」とつぶやいた。サクラは不安そうな目で私を見る。心の中で、サクラに何をがんばれと言うのだろうか。と自問自答しながら、やっぱりがんばってとしか言えない。屠畜され、命のあるうちに血抜きをし、皮をはぎ、吊り下げ内臓をはずす。内臓を解剖し、病気の原因を調べるのだ。一連の作業は迅速に進み、サクラは尿結石だった。皆さん気持ち悪いなんて言わないで！私は生産者だ。牛たちはペットではない。可愛がって大事に育てているから、最後の最後まで責任を持ちたいのだ。誰だって、大切な人の最後を一瞬の一瞬

までも、瞬きもしないで見守っていたいはず。サクラはこうして私にいろんなことを教えてくれた。

紫波町では、もち米ヒメノモチの生産が日本で、このヒメノモチと昔から飼われてきた「しわ牛」を組み合わせ、牛肉のブランド化ができないかと、私は10名の牛飼い仲間と、しわ牛研究会をつくり、数年前から活動してきた。母牛、子牛にもち米の発酵粗飼料ともちワラを与え、肥育牛には、粉碎したもち米ともちワラを与える。こうして出来た「しわもちもち牛」は、甘みとこくがあり、脂身がおいしいと評価をもらっている。自分たちが育てた牛肉を、直接、消費者に届けたいと、紫波町内の産直や宿泊施設、肉屋さんなど、6カ所ですべて1回の販売を始めた。BSE問題のような大変な時期もあったけど、今では地域内外でも認められ、地産地消、安全安心な牛肉として、ホテル、レストランなどで使っていただいている。



しわもちもち牛

2001年のBSE問題をきっかけに、食の安全安心への関心が高まる中、3年前にアメリカ牛肉の輸入禁止になり「家から牛丼が消える日」などと、あたかもこの世から牛丼が消えるかのごとく、泣きながら牛丼をほおぼる人々をマスコミは報じた。牛丼は家庭でも作れるし、そのほうがずっとおいしい。手軽さをありがたがるファーストフードに洗脳された日本人の食文化は、これからどうなるのだろう。

岩手は昔から牛肉を食べるという食文化はなく、牛肉の消費量はごくわずかなものだ。そこで私は、地元の産直がリニューアルするのを機に、7人のお母さんたちと工房「あぐりちゃや」を作った。「あぐりちゃや」では地元の米、野菜、豚肉、しわもちもち牛を使い、惣菜、定食、仕出し弁当をお客様に提供している。家庭の味、おふくろの味が薄れる昨今、昔ながらの家庭料理を次代に伝えていきたいと思っている。「おいしかったです！」と一口も残



あぐりちゃやのお弁当

さずに喜んで帰っていく方々、「この間のお惣菜おいしかったからまた来ました」と来店して下さるお客様。「しわもちもち牛のハッシュドビーフは、他のお店では食べられないから」と遠くから来てくれる。時には反対に、お客様の方から「こうして食べるとおいしいよ」と料理の方法を教えてもらったり、本当にうれしく、ありがたいことだ。おかげさまで「あぐりちゃや」は繁盛している。

あちこちで地産地消、食育という言葉が聞かれるようになって久しい。私はもともと、循環型農業を目指し、実践してきた。「循環型社会に、農業者である私ができることはないかしら?」と思い、NPO 法人紫波みらい研究所」に所属している。「過去 40 年間に 39 種類の新しい病気が増えた」と聞いたことがある。それは、様々な食物が国境を越えて、たやすく口に入るようになったからと言うわけだ。「NPO 法人紫波みらい研究所」では、地元で取れた食材を食卓に取り入れることにより、健康だけでなく、地域の食を通じて自分たちの暮らし方や地域のあり方を見直し、行動していくことを目的に活動している。

こうして、私も 50 歳を過ぎた。80 歳までは元気に牛飼いをしたいと思っている。今まで生きてきた 50 年間には、たくさんの農業情報の移り変わり、牛肉を取り巻く環境の変化があり、いつでも末端の私たち農家にしわ寄せが来



紫波くちや豆

ていたように思う。しかし、そのたびに家族、牛たち、仲間たち、たくさんの人たちの支えがあった。本当に感謝している。

まだまだやりたいことがある。その一つは味噌を作り販売することだ。「あぐりちゃや」のお母さんたちと、毎年味噌を作り工房内で料理に使ってはいるが、販売はしていない。ちょうど、紫波町内では「紫波くちや豆」というブランドで枝豆の販売を始めた。とてもおいしい豆なので、この「紫波くちや豆」で昔ながらの作り方で味噌を作りたいのだ。味噌作りの出来る人も少なくなっている。「牛の堆肥を使い、豆をつくり、体に優しい味噌が出来たら…」と夢は尽きない。

「運」は自分で作るもの、「夢」は叶えるものと生きてきた。私の開拓心は、当分力尽きそうもない。

## 投稿記事募集！

みらい通信を皆さんの力でより良いものにしていきたくと思っています。

あなたの身近な出来事、体験談、意見、イベント情報、欲しいものや譲りたいものなどなど、どんなことでもかまいません。皆さんの声をどしどしお寄せください！

記事投稿に関するお問合せは、みらい研事務局までお気軽にご連絡ください！

TEL019-671-2244 佐藤、籠澤

## 会員の方へ会費納入のお願い

みらい研究所会員の方で19年度の会費をまだ納入していない方は忘れずに納入をお願いします。

年会費	個人会員：	2,000円
	団体会員：	3,000円
	賛助会員：個人一口	2,000円
	法人	10,000円

振込先 郵便貯金総合通帳

記号18390 番号12505671

口座名義：NPO 法人紫波みらい研究所